

日本のお金にはどんな歴史があるの？

昭和 17 年の新しい仕組み

昭和 17 年 (1942) に、法律で紙幣を金貨と引きかえることができるという仕組みがなくなり、世の中の様子によって、通貨 (つうか・お金のこと) を発行する量を管理したり、調整したりできる仕組みになりました。この仕組みは今の政府・日本銀行によっても行われている仕組みです。

昭和 17 年 (1942) 施行の日本銀行法に基づいて発行された日本銀行券



日本銀行兌換券
(にっぽんぎんこうだかんけん
1899 年)

金貨と交換でき
なくなった



日本銀行券
(い十円券)(1943 年)

写真：日本銀行金融研究所貨幣博物館

戦時中の貨幣

日中戦争の拡大から太平洋戦争の終わりまでの間に、お金の使用が増えたため、法律をつくり、金・銀・銅以外の新しい素材の金属によって補助貨幣 (ほじょかへい) がつくられました。今の硬貨 (こうか) のもとになっています。



十銭 (じゅっせん)
アルミニウム青銅貨 (1938 年)

十銭 (じゅっせん)
アルミニウム貨 (1940 年)



十銭錫貨 (じゅっせんすずか) (1944 年)

今の硬貨に
似ている



写真：日本銀行金融研究所貨幣博物館

戦後の新円切り替え

戦争が終わったあと、少しの間、預金の払い戻しのための紙幣が間に合わなくなったので、昭和 21 年 (1946) 「新円切り替え」の時、急いで間にあわせるために、今までの紙幣が使えるあかしの紙をはって全国で使われました。

証紙貼付日本銀行券 (しょうしてんぶにつぼんぎんこうけん)(100円券) (1946 年)



取り換え紙
を貼って使った



写真：日本銀行金融研究所貨幣博物館